

氏名	林 治子		
学位の種類	博士（生涯人間科学）		
学位記番号	甲第生6号		
学位授与年月日	2018（平成30）年3月14日		
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号		
学位論文題目	文化心理学的視座によるワーク・ライフ・バランスの検討 —中高年期におけるスピルオーバーと健康の日米比較—  (A Cultural Psychological Perspective on Work-Family Spillover and Health in Midlife: A Japan-US Comparative Study )		
論文審査委員	主査	教授	唐澤 真弓
	副査	教授	斉藤 慎一
	副査	教授	工藤 恵理子
	副査	北里大学一般教育部教授	島津 明人

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### I. 論文内容の要旨

目的：ワーク・ライフ・バランス（以下、WLB）は、社会システムの充実と就労者個人の主観的な充足感を目指す現代社会の課題である。本論文では、欧米で先行したWLBの推進が日本においては、必ずしも順調に機能していない現実に対して、WLBの心理プロセスに文化差があることを予測し、WLBにおける就労者のWell-beingを文化心理学的視点から検証した。そのうえで、WLBを文化心理学的枠組みから考察することにより、WLB研究および政策への貢献を図ることを目的とした。

文化心理学の理論的基盤である文化的自己観によれば、相互独立的自己観が優勢な欧

米では、個とはお互いが独立した存在であり、それによって自己の内的側面が重要視され、また自己のポジティブな状態が重要となる。これに対して、相互協調的自己観が優勢な日本では、お互いが協調的であり、かつ、社会における期待や役割への適応が個人意志よりも優先されることとなる。こうした文化心理学的から鑑みると、日本における WLB について、1) 自他の境界の曖昧さは、WLB におけるワーク（仕事）とライフ（家庭生活）の境界、独立性がアメリカよりも脆弱または柔軟となること、2) ワークとライフの境界が曖昧な日本では、アメリカよりもスピルオーバーという二つの領域間の波及量は少ないこと、3) ポジティブとネガティブの緩衝効果はアメリカほど見られないこと、4) ライフという個の場よりもワークという公的な場からの影響のほうが日本では強くなることが予想される。

これらの点を検討するために、就労者の WLB を仕事と家庭領域間の心理的連関から捉える「スピルオーバー」に着目し、スピルオーバーが示す二つの次元、すなわち、方向性二側面（仕事から家庭へ：WF, 家庭から仕事へ：FW）と誘意性二側面（ポジティブ：PS, ネガティブ：NS）で構成される 4 要因（WFPS, WFNS, FWPS, FWNS）が、中高年就労者の Well-being（心理的に健康な状態）と Ill-being（健康リスクとなる状態）に及ぼす影響を日米比較し、検討することとした。

方法：日米共同プロジェクト「中高年期のしあわせと健康調査」（MIDUS：Midlife in the U.S.; 日本版 MIDJA：Midlife in Japan）に参加し、そこで得られた日米比較可能なデータの一部を用いて、研究 1～研究 4 の分析を行った。調査は質問紙調査が実施された後、1 年後に健康診断調査（第一次調査）が行われ、4 年後に質問紙および健康診断の縦断調査（第二次調査）が実施された。本研究では、第一次調査 MIDJA1（2008）および MIDUS（2004）、第二次調査 MIDJA2（2012）のデータから、日本人就労者男女 735 名およびアメリカ人就労者男女 1102 名を分析対象とした。

研究 1 では、日本人就労者を対象に、アメリカでの先行研究（Cho et al., 2013）で確認されたスピルオーバーのモデル構造が同定できるかを確認し、スピルオーバー 4 要因の独立性を検証した。研究 2 と研究 3 では、スピルオーバーの波及量の日米差およびスピルオーバーの領域方向性二側面と誘意性二側面が、日米中高年就労者の Well-being（心理的に健康な状態）と Ill-being（健康リスクとなる状態）に及ぼす影響を検証した。研究 4 では、縦断データを用いて、日本人就労者にとって 4 年後の Well-being と Ill-being にスピルオーバー 4 要因が及ぼす影響を検証した。なお、Well-being を測る心

理的指標には、「生活満足感」「夫婦関係の良好さ」「主観的健康感」の3変数を用い、Ill-beingを測る指標には、「抑うつ傾向 (CES-D)」と生理指標の「インターロイキン6 (IL-6)」を用いた。

結果と考察：研究1 (日本におけるスピルオーバーの構造) スピルオーバーの構造の日米比較を行ったところ、スピルオーバーの4要因はアメリカでの結果と同様、日本でも確認された。しかしながら、モデル構造は異なり、アメリカの Dispositional Model よりも Discrete Model が日本ではより妥当なモデルとなっていた。Dispositional Model は、スピルオーバーという個人特性を想定するモデルであり、アメリカでの相互独立的自己観と一致するため、アメリカで最適したのに対し、日本では、相互協調的自己観が優勢なため、アメリカほどモデルが適合しなかったと解釈することができる。

研究2 および研究3 (Well-being と Ill-being を予測するスピルオーバーの緩衝効果) スピルオーバー4要因の交互作用に着目した分析を行った。第一に、スピルオーバー4要因の波及量の日米比較をみたところ、いずれの値も日本よりアメリカで高く、文化的自己観の分析と一致する結果であった。文化的自己観の分析によれば、アメリカでは、自他の境界が明確であり、生活領域間の境界も明確である一方、日本では、自他の境界が曖昧であり、生活領域間のスピルオーバーは認識できるものの、方向性や境界も曖昧なために、波及量が少なくなったと考えられる。次にスピルオーバー4要因の交互作用を検討したところ、先行研究と同様に、アメリカでは、生活満足感、夫婦関係の良好さ、抑うつ傾向の3変数に対して、スピルオーバーの交互作用が「F→W 方向」で有意であった。FWPS がこれら3変数と FWNS のネガティブな関係を緩衝する効果が明らかになったといえよう。これに対して、日本では、FWPS が FWNS を緩衝する効果は認められなかった。日本で有意だった交互作用は、「W→F 方向」で抑うつ傾向に対してであった。WFPS も WFNS も高いと抑うつ傾向も高く、WFPS が高くないことが WFNS の影響を受け難くし、抑うつ傾向を高めないという結果であった。アメリカでみられるようなポジティブがネガティブを緩衝することは日本ではみられず、特に抑うつ傾向に関しては、WFPS も WFNS もともに高いという交互作用のパターンも異なっていることが明らかになった。この結果は、職場で過剰にポジティブに反応することは、同時にネガティブもまた生起させ、抑うつ傾向を高めることにも繋がってしまうと解釈できるであろう。また、日本では、生活満足感には WFNS と FWPS の主効果、夫婦関係の良好さには FWPS と FWNS の主効果が有意であった。主観的健康感に対しては、日米と

もに WFNS の主効果が有意となり、悪影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、スピルオーバー4 要因と生理指標との関連と検討した。その結果、日米共に、スピルオーバーの心理変数には影響を及ぼしていたが、Ill-being の生理指標として検討した血液中の IL-6 への影響は日米ともに認められなかった。スピルオーバーの影響がどのレベルで起きるのかについて、今後、コルチゾールなどさまざまな生理指標で検証する必要があるだろう。研究 4（日本におけるスピルオーバーの縦断的分析）縦断データを用い、4 変数（生活満足感、夫婦関係の良好さ、主観的健康感、抑うつ傾向）に対する 4 年後のスピルオーバーの影響を検討したところ、T1 時と同様、4 年後の FWPS が、夫婦関係の良好さ、主観的健康感に影響を与えることが明らかになったが、生活満足感ではその効果がみられなかった。また、抑うつ傾向に対する交互作用は見いだされなかった。

Well-being と Ill-being へ影響を及ぼすスピルオーバー4 要因の日米差は、それぞれの文化にある「領域方向性」が示す仕事と家庭の優位性と、「誘意性」が示すポジティブとネガティブとの関連についての、これまでの文化心理学における分析と一致するものである。すなわち、相互独立的自己観が優勢なアメリカでは、個人の趣向が重要であり、ライフという私的な個の場である「家庭」が第一義的な存在になり、家庭へのスピルオーバーが日本と比べて大きくなったといえよう。これに対して、相互協調的自己観が優勢な日本では、社会的な役割を果たすワークという公的な場での職場や仕事が重要であるため、「仕事」が第一義的な存在になり、ライフという個の場よりもワークという公的な場からの影響のほうが日本では強くなったと考えられる。また、ポジティブを重要視するアメリカとは異なり、ポジティブがネガティブを緩衝する効果が日本で見られなかったことは、日本では、ポジティブとネガティブが陰陽のように循環し合う考え方が強いために、その傾向が見られなかったと考えられるであろう。

結論：本論文では、仕事と家庭領域間で生起するスピルオーバーの 4 要因を用いて、日米比較したところ、日米で異なる結果が示された。アメリカでは、スピルオーバーは、Well-being 維持のために家庭からのポジティブな影響がネガティブな影響をバッファすることとなるが、日本では、むしろ、仕事から家庭への方向の影響のみが強くみられた。また Ill-being の抑うつ傾向については、アメリカでは Well-being における結果と同様、ポジティブな影響がネガティブな影響をバッファすることとなるが、日本ではポジティブとネガティブが双方に高いことが影響していた。スピルオーバー4 要因が心身

の健康に及ぼす影響を日米比較したことにより、日本でのワーク・ライフ・バランスの施策に対して、欧米に追随する形で導入するには困難が伴うことを示唆することが可能となろう。

## II. 審査の結果の要旨

### 1. 論文の構成

本論文は、6章からなる。第1章では、欧米で先行したワーク・ライフ・バランス施策への日本の取り組みと現状から、欧米の政策を日本に取り入れる困難さを指摘した。もちろん、欧米の政策を直接日本社会に組み込んでいるわけではなく、政府においても社会システムや歴史文化的背景は考慮されているものの、ワーク・ライフ・バランスの心理的意味の文化差にまで踏み込んではいない。申請者は、ワーク・ライフ・バランスの心身の健康（Well-being と Ill-being）に関する心理学的研究を概観し、日本における意味を検討するためには、文化心理学的視点が有効であると提案し、ワーク・ライフ・バランス研究における文化比較研究の意義を論じている。本論文では、ワーク・ライフ・バランスの指標として、スピルオーバーに着目している。スピルオーバーとは、一つの領域役割に参与した状況や感情が、もう一つの領域役割にまで持ち込まれ、拡大、影響を与えることである。「ワーク」と「ライフ」の波及状態をとらえる測度として用いられてきているが、また、文化的自己観の分析から、2つの領域の境界性、誘意性の重み付けや関連が文化によって異なる可能性を示すと予想される尺度でもある。これらの研究のレビューを踏まえて、本研究の仮説が提示され、研究の目的が明確にされている。続く、第2章から第5章では、本研究の仮説を実証する、4つの研究がまとめられている。第2章（研究1）では、スピルオーバーのモデル構造が日米で異なっていることが明らかにされた。第3章（研究2）では、スピルオーバーが Well-being（心理的に健康な状態）に及ぼす影響を仕事と家庭領域間スピルオーバーの方向性（仕事から家庭へ、家庭から仕事へ）と誘意性（ポジティブとネガティブ）とその交互作用から、日米を直接比較した分析を行い、文化による違いと類似性を明らかにしている。続く、第4章（研究3）では、研究2同様の方法で、スピルオーバーが Ill-being（健康リスクとなる状態）に及ぼす影響を検証した。この研究3では、病院診療で用いる評価尺度や生理指標を用いている。第5章では、日本における縦断データを用いて、日本で4年後の心身の健康にスピルオーバーが及ぼす影響を検証した（研究4）。第6章では、4つの実証研究か

ら得られた結果を統合し、スピルオーバー研究における文化比較の位置づけと意義を文化心理学の理論的枠組みに準拠して考察し、本研究の意義と限界を述べ、最後に、ワーク・ライフ・バランス政策への比較文化的研究からの提言と今後の展望を示している。論旨の展開は明晰に理解することが可能であった。

## 2. 論文の特徴

本論文は、これまでのワーク・ライフ・バランス研究に対し、文化心理学的視点から検討した、ユニークな論文である。特に欧米で開発されてきたワーク・ライフ・バランスの指標として、スピルオーバーに着目し、日米のラージ・サンプルデータを直接比較した、ほぼ唯一の研究結果を示したといえよう。文化比較研究は、質問項目ひとつをとっても、翻訳、バックトランスレーション、項目の文化内妥当性、文化間妥当性を検討する綿密な手続きが必要である。この論文は、大規模プロジェクトの一員として、こうした比較研究のステップを丁寧に踏まえて、計画され、収集されたデータに基づいたものであり、大変貴重なデータでもある。また、スピルオーバーを主観的心理的指標と生理的指標と複層的に検討したこと、さらにそれらの指標を Well-being と Ill-being として広義の心身の健康感としてまとめ直したこと、スピルオーバーのポジティブネガティブ交互作用の分析をしたことは、方法論的にも独創性を確認できるものである。多くの比較研究にあるように、単に日米データを比較するだけでなく、その差の解釈を暗黙にある自己観、文化の分析にまで広げた点は、本論文の最も興味深い点であろう。従来、社会学を中心に、日本国内の研究が中心に進められてきた研究テーマに、文化心理学的視点を加え、今後のワーク・ライフ・バランス研究に新たな視点を与えた学際的研究としても評価できる。また、文化比較研究としても、大規模サンプルを用いて、生理的指標と心理的指標での検討を行うことは、文化が人間の心理プロセスに及ぼす影響の“深さ”を議論するための重要なデータを提供しているといえる。

## 3. 論文の評価

論文の構成と特徴で述べたように、スピルオーバーによるワーク・ライフ・バランスの文化比較研究といったテーマの独創性、問題意識の明確性、方法の独自性、先行研究との関連と位置づけの議論、ワーク・ライフ・バランスおよび文化心理学研究分野における研究成果の貢献度において、優れた論文である。論証の緻密性、文章表現の妥当性

において、さらに洗練すべき部分は少なくないが、結論として本論文は課程博士の学位認定に十分適切なものと評価する。

#### 4. 最終試験の概要

2月15日午後5時半から7時半まで、公開形式で最終試験が実施された。申請者が45分間、論文の概要について、発表し、その後審査委員からの質疑応答が行われた。主な内容は、サンプルについて（ヨーロッパではなくアメリカを対象としたこと、中高年を対象としたこと）、概念について（バランス、スピルオーバー、Ill-being と well-being、IL-6）、日米の調査の手続きの文化比較研究としての妥当性について（サンプリング、地域）、統計分析の妥当性について（重回帰分析における共線性、男女別モデルの適合性）、社会政策へのインプリケーションについてであった。これらについて、申請者は概ね適切な回答をしており、最終試験は合格とした。

なお、外国語試験（英語）は、口頭で行われた。上記の質疑内容の一部は英語で行われ、申請者は、ほぼ適切に英語で回答していた。また試験とは別に、これまでの海外での学会発表やアメリカとの共同研究能力があることは、英語能力について肯定的な評価となった。総じて、研究分野における英語能力は十分であるとして、外国語試験も合格であることが確認された。